

2018 年度 わがまち魅力化プロジェクト
～サステイナブルな地域社会の創生事業～
事業報告書

2019 年 3 月

一般財団法人社会開発研究センター（SDRC）

一般財団法人日本総合研究所（JRI）

目 次

1. 本事業の目的と概要.....	1
(1) 本事業の背景と目的.....	1
(2) 本事業の概要	2
2. 鳥取県日野町でのフィールドワーク	4
(1) 日野町魅力化プロジェクトの活動概要	4
(2) 実施内容.....	5
(3) 2018 年度プロジェクト企画における成果と課題	13
(4) 3 年間の成果と課題	15
3. 実践フィールド（地域）の拡大に向けた取組.....	19
(1) A 市でのヒアリング結果	19
(2) B 市でのヒアリング結果	20
(3) 2 地域とのコラボレーションの可能性	21
4. 今後の展開に向けて.....	23
(1) わがまち魅力化プロジェクトの展開.....	23
(2) プラットフォーム設立準備.....	23

1. 本事業の目的と概要

(1) 本事業の背景と目的

現在、わが国において少子高齢化、人口減少が進む中で、特に地方ではその影響が大きく、過疎や産業の衰退等、住民の暮らしに直結する課題が山積している。一方で、各地域には魅力ある資源（自然、文化・伝統、工芸、農水産物、歴史等）が存在しているのも事実である。多様性豊かな地域を残していくためには、その地域の魅力を発掘し、磨き、それを伸ばしていくことが必要であり、それが地域の豊かさや幸福へとつながる。さらに、そのような地域の魅力を効果的に発信することで、その地域に目を向けてもらい、交流やインバウンドにもつながられる。各地域には、そのようなポテンシャルが存在する。

地域活性化や地方創生等、魅力ある地域づくりに向け、現在、日本各地で様々な取組が行われている。その多様な取組の中でも、地域課題の解決に導く一つ的手段として、「地域外」の視点や「若者」の視点の活用が注目されている。昨今、そのような活動に関わる地域外の若者（大学生等）も増えてきている。一方で、大学生が地域課題の解決に取り組む上で、活動の継続性や組織的な支援などの課題も指摘され、また地域と大学生との間を仲介するコーディネーター的な存在が不可欠との指摘もある。若者の発想と行動力を地方創生や地域の魅力化に資する力に変えていくためには、地域と若者のつなぎ役としてシンクタンクの役割も大きい。

そこで本事業では、複数年の事業期間を想定し、まずは1年目（2017年度）の事業ステップとして、関連する取組事例の情報収集を行い、さらに2016年（平成28年）より実践されている「日野町魅力化プロジェクト」※への参画を足掛かりに、日野町でのフィールドワーク等を通じて、持続可能な地域社会の創生に向けた取組のあり方、取組推進のためのプラットフォームのあり方等を検討した。それを踏まえ、2年目（2018年度）の事業では、「日野町魅力化プロジェクト」への継続的参画とともに、わがまち魅力化プロジェクトのパッケージ化の検討・試行、実践フィールド（地域）の拡大のための他地域へのヒアリング、プラットフォームの枠組みの検討を行った。

※日野町魅力化プロジェクトの概要

2016年（平成28年）より、鳥取県日野郡日野町において、学生によるまち歩きプロジェクトを実施。プロジェクトの目的は、高齢化と過疎で悩む日野町をフィールドに、大学生がまち歩きや体験等を通じて、まちの課題や魅力を探ること。

- 2016年、故・安田泰敏九段(囲碁棋士、元東京富士大学特任教授)が、地域おこし協力隊をハブとして大学生と町をつなぎ、双方の成長・発展につながるプロジェクトとして発案され始動。初年度は東京富士大学の企業ビジネス研究同好会の学生が中心に参加。
- 行政・地域（窓口：企画政策課、地域おこし協力隊、協力：町議会、地域住民（ホストファミリー等））と、都市と地方の学生（東京富士大学・鳥取大学・島根大学等）のコラボレーションにより実施。
- 日野町でのまち歩きや体験を通じて、「産業」「観光」「移住定住」等の側面から地域課題やまちの魅力を探り、学生から事業化アイデアを提案。
- まち歩きは年1回（2016年～、夏季休暇中）実施。毎年、検討テーマを設定。

(2) 本事業の概要

① 1年目事業の概要（成果、明らかになったことと今後の課題）

本事業は複数年の事業期間を想定し、昨年度は初年度の調査研究活動として、以下の点について重点的に情報収集及び研究活動を行った。

(1 年目事業の詳細は、「わがまち魅力化プロジェクト～サステイナブルな地域社会の創生事業（事業報告書）」（社会開発研究センター/日本総合研究所, 2018.3）参照。）

【1年目の事業「トライアル・情報収集期間」】

(i) 全国事例の情報収集

魅力化プロジェクトに関連する学生によるまち歩き活動等、地域活性化に向けた取組事例や取組推進のプラットフォーム等の活動形態把握のために、情報収集・整理（先行事例研究）。

(ii) 日野町でのフィールドワーク

「日野町魅力化プロジェクト」（学生によるまち歩き活動）への参画、事前・事後の現地での地域情報収集・整理（住民や地域おこし協力隊等の関係者へのヒアリング）、フィールドワークから得られた示唆のとりまとめ。

(i) 全国事例の情報収集

- 全国事例（先行事例）を対象学生と派遣先、活動内容の特徴から分類。10 事例について情報を収集・整理した。
- 活動推進上の課題は、主に①参加学生の確保、②新規・継続自治体の確保、③事務局機能の整備（体制整備）に集約が可能である。
- ①と②に対しては、学生や自治体との継続的なコミュニケーションが不可欠。③に対しては、学生主体という特徴は残しつつも、別組織の関与やプラットフォーム形成による組織的なバックアップも必要である。特にシンクタンクは中立的・第三者的な立場から、学生と地域、様々な関係者・機関との「つなぎ役」を担える可能性がある。
- 学生をはじめ若者の発想や行動力は、地域の活性化や魅力化に資する力になり得る。その力を各地に広げていくには、大学のほか複数の機関・組織が連携しながら、より効率的に実践活動を進めていくことが望まれる。

(ii) 日野町でのフィールドワーク

- 地域資源の組合せによって、「日野町ならでは」、「日野町といえば…」のブランド創出を図っていくこと、そのためのアクションプランの作成と実践（事業化）につなげていくことが必要。実際、今回の学生からの提案からは、日野町の地域資源である「オシドリ」と「金持神社」を組み合わせ、“オシドリが取り持つ縁”をストーリー化した、ご当地婚姻届「オシドリ婚姻届」が企画・制作された。
- 地域づくりの主体は、そこに住む地域住民である。地域住民と若者やヨソ者の力を融合しながら、地域住民が自ら地域のことを考え、行動していくことが、サステイナブルな地域づくりには不可欠であることを、フィールドワーク・ヒアリング等を通して再認識した。

- 
- “町民自らがこの地域のことを考え、実行すること”を前提に、「人づくり」「場づくり」「生業づくり」という観点から、今後の事業プランを町（行政）へ提案。
 - 事業の基盤づくりに向けて、以下の３点を翌年度に向けた課題とした。
 - （i）フィールド拡大・取組の普及に向けたプロジェクトのプログラム化
 - （ii）フィールド拡大に向けた各地域へのヒアリング、交流
 - （iii）取組推進、事業継続性担保のためのプラットフォーム枠組み検討

② ２年目事業の概要

１年目の成果と課題を踏まえながら、２年目である今年度事業については、「展開・開発期間」と位置づけ、実践活動については、日野町でのフィールドワークのプログラム化、パッケージ化の検討を進めるとともに、新たな実践フィールドの開拓に取り組んだ。さらに、取組推進のためのプラットフォームの構築に向けた枠組みの検討を行った。

【２年目の事業「展開・開発期間」】

（i）日野町でのフィールドワークのプログラム化

「わがまち魅力化プロジェクト」のパッケージ化も目指して、日野町をフィールドとして実施。参加学生がプロジェクトに目的意識と当事者意識をもって参画するための事前・事後の働きかけ（ワークショップ、アンケート等）をプログラム化。

（ii）実践フィールドの拡大に向けた取組

「わがまち魅力化プロジェクト」の日野町以外の新たなフィールド開拓のため、複数の地域への訪問ヒアリング調査を実施。

（iii）プラットフォームの枠組み検討

取組推進のためのプラットフォームの枠組み（設立目的や役割、機能、連携先候補等）を検討。

2. 鳥取県日野町でのフィールドワーク

(1) 日野町魅力化プロジェクトの活動概要

① 目的

都市部と地方の大学生が鳥取県日野町にホームステイし、町民と交流しながら過ごし、地域の魅力や課題を考える。

【企画意図】

- ・大学生のアイデアを日野町の魅力化や地域おこしに役立てる。
- ・参加学生にとって、過疎地域の問題や田舎の環境に直に触れる経験、日野町住民との交流や他大学の学生との交流など成長機会となる。
- ・都市部や他地域の若者とつながりができ、今後も地域おこしをはじめ様々な連携が期待できる。

② 実施主体

主催：日野町魅力化プロジェクト実行委員会（実行委員長 中山法貴氏・日野町地域おこし協力隊）

後援：日野町

協力：東京富士大学 企業ビジネス研究同好会（顧問：渡辺泰宏 准教授）、
一般財団法人日本総合研究所、一般社団法人 I G O コミュニケーションズ

③ 参加者

合計 9 名（男性 4 名、女性 5 名）

東京富士大学（学部生 4 名）、横浜国立大学（学部生 1 名、院生 1 名）、フェリス学院大学（学部生 1 名）、青山学院大学（学部生 1 名）、島根大学（院生 1 名）

④ 概要

- ・2016 年から毎年（大学の夏季休暇中）、チームに分かれて町の魅力や課題を調べ、最終日に報告会を実施し事業化アイデアを提案する。2016 年度と 2017 年度については、「産業」「観光」「生活」のテーマごとにチームを作り、それぞれのテーマに沿ってフィールドワークとプランの提案を行った。2018 年度には、全チーム共通で、農業をテーマの主軸として、産業活性化、交流人口や観光客の増加策を検討した。
- ・今年度は、過去 2 年間の振り返り事項を踏まえて、次のような変更をしてプログラムを実施した。

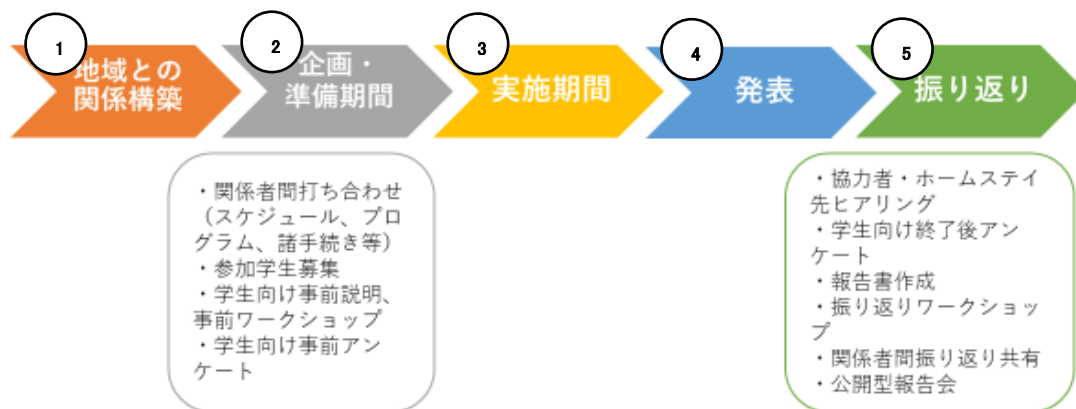
【主な変更点】

- 受入れ態勢等への考慮から、短期集中プログラムへ変更（4泊5日から2泊3日へ）。
現地滞在時間が短くなることから、それを補完するため、事前ワークショップ（勉強会）、終了後の振り返り会を実施。
- 学生募集方法を追加
既存の協力大学（東京富士大学、島根大学、鳥取大学）に加え、新たに他大学からも意欲の高い学生を募集。2018年の参加学生の所属大学は、東京富士大学、島根大学、横浜国立大学、フェリス学院大学、青山学院大学の5校となった。
- 地元高校生とのコラボレーション（高大連携）の可能性を探索
参加学生を大学生だけでなく、地元の高校生も含める方策を検討していたため、プログラムを短期化。結果的にプログラム実施期間の調整が難しいことから、今年度の実現には至らず今後の課題とした。

（２）実施内容

日野町での「わがまち魅力化プロジェクト」実施にあたり、下図のようなプロセスで企画・コーディネートに参画した。以下、①～⑤においてそれぞれのプロセスにおける実施内容を記載する。

図表１．わがまち魅力化プロジェクトの実施プロセス



① 地域、各機関との関係構築、企画調整

ー現地（日野町）との企画調整

フィールドワーク実施の約2か月前に日野町を訪問し、実行委員会（委員長の地域おこし協力隊）、日野町役場等と打ち合わせを実施。プロジェクトの実施方針、企画概要の調整を行った。

ー関係機関との企画調整、情報共有

実施主体となる東京富士大学、参加学生募集にあたり協力いただく横浜国立大学等と打ち合わせを実施。

② 企画・準備期間

(a) 事前ワークショップ (8月上旬)

参加学生を対象とした事前説明・ワークショップの機会を設けた。

—限られたプロジェクト期間の中で学生間のチームワークが求められることから、事前ワークショップの機会を活用して、お互いを知ることができるよう学生同士が話すセッションを設定した。参加できなかった学生にも共有できるよう、顔写真と自己紹介カードを作成、関係者間で事前に共有した。

—学生が日野町に関する情報収集や事前調査を進められるよう、地域を見るときの視点をレクチャーするとともに、参考になる資料を配布した。

(b) 事前アンケート

参加学生の事前準備状況やプロジェクトへの参加意欲を把握するために、事前アンケートをWEB上で実施した。

【アンケート調査結果】

Q1. 事前に準備・勉強したこと (複数回答可)

項目		人数	割合
1	参加学生のプロフィール確認	8	88.9%
2	日野町について調べること(位置・面積・人口と人口推移・地域資源)	9	100.0%
3	日野町について調べること(産業・農業・観光・移住定住の取組等)	7	77.8%
4	日野町を含む広範な地域について調べること(日野郡・鳥取県・山陰地方・中国地方等)	1	11.1%
5	日野町以外の地域について調べること(地方創生や地域活性化の取組等)	6	66.7%
6	ビジネスプラン作成にあたってのスキルの習得(書籍等での勉強等)	2	22.2%
7	その他	0	0.0%
合計		9	—

Q2. 目標ややってみたいこと

項目		人数	割合
1	ある	5	55.6%
2	ない	4	44.4%
合計		9	

* 目標ややってみたいことの内容 (例示)

- ・プロジェクト中に町民の方 30 人以上と話をする
- ・写真と動画の撮影・編集・発信、人脈づくり
- ・日野町の魅力を発見し、同じく過疎化している地域に参考になる情報を提供する
- ・自分たちの住んでいる地域との違いを感じる

・日野町や山陰地方にしかない魅力をどうやって遠方で知ってもらえるのか参加学生と討論する。また日野町に住む地元住民へもメリットがある地方の魅力化とは何かを見る。

Q3. 関心のあるテーマ

項目		人数	割合
1	農業	1	11.1%
2	観光	7	77.8%
3	移住定住	1	11.1%
合計		9	

③ プロジェクト実施期間

以下のようなプログラムで、8月20日(月)から8月22日(水)までの2泊3日でプロジェクトを実施した。

図表2. 日野町魅力化プロジェクトのプログラム

		内 容
8月20日(月)	13:00	根雨駅到着⇒オリエンテーション
	14:00	日野川ラフティング
	16:00	リバーサイドひの で入浴
	17:00	2日目(フィールドワーク)の準備、グループワーク
	19:00	ホームステイ先へ(夕食、滞在)
8月21日(火)	8:15	ホームステイ先を出発、移動⇒日野町役場へ
	8:30	【フィールドワーク】 ◎観光の現状を知る 奥日野ガイドクラブ
	10:30	◎農業の現状を知る ・農家の方のお話(小林さん)
	12:00	昼食(古民家沙々樹)
	13:00	(日野町役場) ◎移住政策の現状を知る(日野町企画政策課)
	14:15	【グループディスカッション】 黒坂公民館 ◎【全員】学びの共有(発散)と現状整理 ◎【チームごと】ビジネスプラン作成
	18:00	上菅ゲストハウスでの食事会・交流会
	20:15	ホームステイ先へ
8月22日(水)	8:15	ホームステイ先出発、移動⇒山村開発センターへ
	9:00	プレゼン大会
	10:00	
	11:00	マスコミ取材
	12:00	終了、解散

④ 発表

プロジェクト最終日には広く地元住民等にも参加していただく形での発表会を開催した。学生からのプレゼンで提起された日野町に対する課題認識と解決策は以下のとおり。

図表 3. 日野町魅力化プロジェクトでの学生プレゼン内容（まとめ）

課題認識	・町自体のPR力の低さ（町の公式facebookのコンテンツに魅力がないなど）。 ・若者視点のネット検索方法では、「日野町」はヒットしない。 ・観光スポット（金持神社・金持テラス等）の未活用。 ・SNS上でシェアするための写真が残らない（ラフティング時など）。 ・農作物の品質に対する価格の低さ。 ・若者にとって観光、移住・定住に向けた効果的な施策がない。
解決策	・若い世代にとって魅力的な「空き家宿泊施設化」（BBQ、キャンプファイヤーなどの発散系・活動系）、それに加えて「希望制ツアー」の企画 ・「農業×IT」によるインターネット販売「愛菜（まな）イチバ」、その売上の一部を基金として空き家を改修し、クリエイターに提供、さらに「観光×黄色」で町をカラーブランディング ・古民家と耕作放棄地を有効活用した「カスタマイズ週末農園」

⑤振り返り

（a）学生向け参加後アンケート

プロジェクト終了後に、学生自身の率直な感想を把握するとともに、自身の成長や変化を振り返ることを目的として参加後アンケートを実施した。

【アンケート調査結果】

Q1. 一番印象に残っている出来事

○最終日のプレゼン（3名）

- －アウトプットの良い機会になった。
- －自分の力を過信していることを痛感できた。
- －短期間で集中して取り組めた。

○ホームステイ（3名）

- －町の方がとても親切にやさしくしてくださった。
- －初めてのホームステイだった。
- －自然の中で生活しているような感じだった。

○ラフティング（2名）

- －経験したことがなかった。自然との一体感に感動した。

－日野町の魅力として大きいと感じた。

○プロジェクト期間中のプレゼン資料へのフィードバックタイム（１名）

－実際に活動主体として想定される地域おこし協力隊と、話しながら作ることができた。

Q2. うまかったこと、成長したこと

項目		人数	割合
1	ある	9	100.0%
2	ない	0	0.0%
合計		9	

○コミュニケーション

－どんな方とも距離が近くなれた。

－老若男女関係なく自ら話しかけることができた。

○プレゼン力

－人前に立って、自分の意見を発表する機会が良い刺激となった。

－プレゼンで自分自身をアピールできた。有言実行して日野町からの信頼を得たい。

○観察力

－町の様々な面から「どこが魅力で、どこが不足しているか」という視点で客観的に見ようという意識が強くなった。

○体験による成長

－中国人が一人もいないフィールドワークが初めてだったが、日本人学生たちと仲良く過ごすことができ、学生たちのチームワークの良さを実感した。

Q3. もっとこうすればよかったこと

○事前準備

－プレゼンに向けた準備

－日野町に関する事前準備

○交流

－他のチームの学生にもっと積極的に声をかければよかった。

－年上の人に些細な事でも質問できる力をつけておけば、町民の方からもっと色々な話を聞けたと思う。

Q4. 日野町の魅力

○ひと

－都会と違い、人とのかかわる雰囲気がとても強く感じた。町民同士で食べ物等をあげたりもらったりしていることに驚いた。人ごみもなく心に余裕がありそうだった。

－町の人が温かい。

○自然・生活

－東京のような殺伐とした雰囲気がなくのどか。

－川をはじめ、きれいな水が多くあること。くらしの癒しになる。

Q5. 日野町の課題

- ・移動の不便さ
- ・生活の不便さ（コンビニが少ない）
- ・娯楽施設がほぼない
- ・雇用機会が少ない

=運営面=

Q6. プロジェクトの期間（2泊3日）

項目		人数	割合
1	もっと長いほうがよい (4泊5日以上)	1	11.1%
2	ちょうどよい	6	66.7%
3	もっと短いほうがよい	0	0.0%
4	その他	2	22.2%
合計		9	

- ・その他

－3泊4日くらいがちょうどよい

－参加者側としては、日数が増えればそれだけヒアリングもできるのでよいが、運営面の負担が大きくなる。何泊かは宿泊施設で、何泊かホームステイなどでもよいと思う。

Q7. プロジェクトの実施時期

項目		人数	割合
1	もっと早いほうがよい	0	0.0%
2	ちょうどよい	9	100.0%
3	もっと遅いほうがよい	0	0.0%
合計		9	

Q8. 事前説明会（参加者7名）

- ・初めて現地で顔合わせとなると緊張感等もあるので、事前の顔合わせがあって良かった。
- ・初めて参加する学生はゼロからのスタートになるので、事前学習や顔合わせによる負担軽減は良かった。

(b) 振り返りワークショップ（9月26日(水)）

魅力化プロジェクトについての学生視点での改善点、学生自身が今後の日野町との関わり方を考える機会を設けるため、振り返りワークショップを実施した。

○内容

3セッションに分けて進行し、学生から自由に意見を出してもらうポストイット・ワークショップを行った。



Session1 「日野町」を振り返る

…学生の町に対する率直な感想を聞き、地域おこしの材料とする

Session2 「日野町魅力化プロジェクト」を振り返る

…プロジェクトの評価軸の材料とする

Session3 今後の学生と日野町との関係を考える

…町と参加学生の関係の質を高め、継続的なつながりを生む

➤ Session 1 「日野町」を振り返る

【学生の意見】

○魅力に感じたこと・楽しかったこと

①ひと

- ・ホームステイ先での話がためになった
- ・ホームステイ先のご夫婦が理想的だった
- ・ホームステイ先のご家族が優しくかった

②食べ物

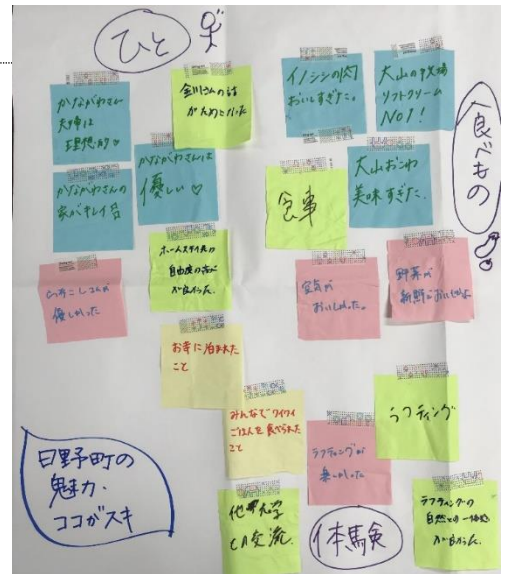
- ・美味しかった（新鮮な野菜、イノシシの肉、ホームステイ先の食事、空気も美味しかった）

③体験

- ・ラフティングでの自然との一体感が良かった
- ・みんなでワイワイご飯を食べられた
- ・他大学の学生とも交流できた

○物足りなかった、不満・不足に感じたこと

- ・合宿施設のようなものがあると、便利
- ・鳥取の有名な観光地である鳥取砂丘から遠いこと
- ・虫が多かった



➤ Session 2 「日野町魅力化プロジェクト」を振り返る

【学生の意見】

○こんなプログラムがあれば良かったと思うこと

①現地の住民の方や若者・学生との交流

- ・日野町内に住んでいる学生に話を聞いたかった
- ・フィールドワークに自由時間を設けて、町内の住民の方ともっと話したかった
- ・最終日に提案したビジネスプランについて、住民の方の声をもっと聞いたかった
- ・年に1回以上交流をしたい（プロジェクトの前後など）

②フィールドワーク、体験の充実

- ・農業のお手伝いを実際にしてみたかった
- ・周辺（日野町外）の観光資源についても行って見たかった

③参加学生同士の交流

- ・他のチームともっと交流したい

④プログラムの進行

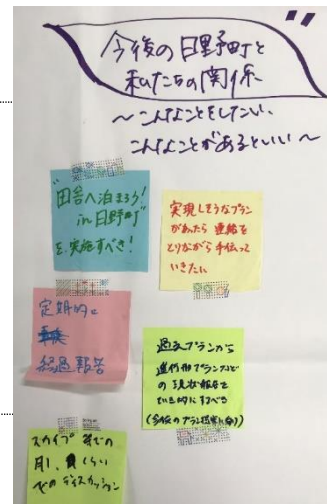
- ・班ごとのテーマを早い段階で決めておくべきだった(班としての反省)
- ・プランが実現したら、一緒にたずさわりたい

➤ **Session 3** これからの日野町との関わり

～大学生と日野町とで一緒にこんなことをしたい～

【学生の意見】

- ・実現しそうなプランがあったら連絡をとりながら手伝いたい
- ・定期的に経過共有するなどやりとりしたい
- ・スカイプ等で月1回くらいディスカッションをしたい
- ・過去に提案したプランや現在進行中のプランなどを知りたい
- ・田舎へ泊まろう in 日野町を実施すべき



(c) 東京での報告会開催

本プロジェクトについて、首都圏在住または首都圏勤務の社会人等から評価をいただくとともに、参加学生にとっては日野町との関係継続、自身の経験を伝えることによる成長の機会とするため、東京での報告会を実施した。

○開催概要

テーマ：大学生が中心となった地方創生～日野町魅力化プロジェクト報告会

日 時：2019 年 2 月 20 日（水）

場 所：3 × 3 lab future

（東京都千代田区大手町 1-1-2 大手門タワー・JX ビル 1 階）

主 催：一般財団法人日本総合研究所

共 催：エコツツェリア協会

協 力：東京富士大学「企業ビジネス研究同好会」

○プログラム

- ・はじめに
- ・講演①「日野町魅力化プロジェクト 3 年間の成果と課題」
（元・日野町地域おこし協力隊 中山法貴氏）
- ・講演②「参加学生の視点から一地方創生にチャレンジした経験からの学び」
- ・ワークショップ
（農業による地域活性化策とは、「関係人口」の可能性とは）
- ・感想・アンケート記入
- ・交流会

当日は、日野町魅力化プロジェクト参加学生と鳥取県庁や島根県庁、鳥取銀行、新日本海新聞社等、鳥取県・山陰地方に関係する行政、民間企業の方々を含め 25 名の社会人・学生が参加、本プロジェクトについて第三者視点での評価をいただくことができた。参加者は、日野町について、町の状況のある程度知っている人が半数程度、名前も聞いたことがなかった方が 3 分の 1 程度であった。

ワークショップでは様々な世代・立場の参加者同士による自由な話し合いによって、農業を

主要産業とする日野町の活性化にも通じるアイデアが出されるとともに、参加者がそれぞれの立場から、自分にできることを見つめなおしながら地方創生を考える機会となった。

図表4. イベント参加者の属性

参加者属性		男性	女性	合計
学生	高校生	0	1	1
	大学生	3	2	5
社会人	行政職員	5	1	6
	学識者(大学教員)	3	0	3
	民間企業	7	2	9
	その他	1	0	1
合計		19	6	25



(3) 2018 年度プロジェクト企画における成果と課題

本報告書の5ページに記載した、以下の【主な変更点】を踏まえながら、今年度の日野町魅力化プロジェクトの成果と課題を整理したい。

【主な変更点】

- 受入れ態勢等への考慮から、短期集中プログラムへ変更（4泊5日から2泊3日へ）。
現地滞在時間が短くなることから、それを補完するため、事前ワークショップ（勉強会）、終了後の振り返り会を実施。
- 学生募集方法を追加
既存の協力大学（東京富士大学、島根大学、鳥取大学）に加え、新たに他大学からも意欲の高い学生を募集。2018年の参加学生の所属大学は、東京富士大学、島根大学、横浜国立大学、フェリス学院大学、青山学院大学の5校となった。
- 地元高校生とのコラボレーション（高大連携）の可能性を探索
参加学生を大学生だけでなく、地元の高校生も含める方策を検討していたため、プログラムを短期化。結果的にプログラム実施期間の調整が難しいことから、今年度の実現には至らず今後の課題とした。

① 成果

➤ 短期集中プログラムへの変更

かなりタイトなスケジュールではあったものの、現地の実行委員長がポイントを押さえたコンパクトなプログラム構成を企画したこともあり、学生が集中力高く、フィールドワークやプレゼンの準備に取り組むことができた。

現地での滞在期間も短いことから、事前ワークショップと事後の振り返りワークショップの機会を設けた。事前ワークショップは、日野町に関して考えるとともに、プロジェクト参

加前の顔合わせの機会となり、スムーズなプログラム進行につながった。事後の振り返りワークショップでは、学生自身が今後の日野町との関わり方を考える機会となり、プロジェクトを一つのきっかけとして、学生と日野町との継続的な関係づくりにつながった。

➤ 学生募集方法の追加

交通費を一部自己負担する前提でありながら、自ら手を挙げて参加する意欲の高い学生を集めることができた。様々な大学、かつ学部1年から大学院1年までの多様な学生たちが参加し寝食をともにしたことで、体験を通じて良い刺激を与えあう機会となった。

➤ 学生と町の関係継続

プロジェクト後も、学生と町民が連絡を取り合ったり、学生自身が提案したプランを自ら実現するために町民の協力を得ながら事業化を進めたりするなど、プロジェクトを一過性のイベントとせず、継続的な関係性が育まれている。学生自身の意欲や関心の高さによる部分が多いが、終了後のプログラムとして振り返り会や報告会等の機会を設けたことも関係継続の促進要因となった。

② 課題

➤ 短期集中プログラムへの変更

フィールドワーク等には学生が集中力高く取り組んだ一方で、普段の学業や生活の場面において接点の少ない分野である「農業」等については、インプットすべき情報が十分でない部分も見受けられた。今後に向けては、対象となる地域ごとに重点的に学ぶテーマを設定し、最低限の情報は参加学生間で事前に共有しておく必要がある。

➤ 学生募集方法の追加

複数大学から多様な学生が参加したことによる成果は大きかった一方で、学生の事前・事後のフォローの負荷は増えた。今後も参加学生を幅広く集めることを想定するならば、プロセスの効率化を合わせて検討する必要がある。

➤ 地元高校生とのコラボレーション（高大連携）の可能性を探索

日野町でのフィールドワーク期間中に地元高校生のプログラム参画を図ったが、高校の年間スケジュールとの調整等が難しく、高大連携については今年度の実現には至らなかった。首都圏の大学生が地元の高校生や若者と共に魅力や課題を探ることは、互いにとって貴重な経験になるとともに、プロジェクトで提案されたプラン等を現地で実現していく人材を想定したときに力強い資源ともなる。また、高校の存続危機から「高校の魅力化」を都道府県が補助金等を出して支援するケースも多く見られることから、プロジェクト運営資金を確保しつつ、さらに大きい効果を生み出していくためにも重要なテーマといえる。高校との連携にあたっては、前年度のうちにプログラム等を企画・設計し、高校の年間行事スケジュールとの調整を済ませておくことが必要であり、高大連携を実現するには、魅力化プロジェクトを毎年計画的・継続的に実施していくことが前提となる。

(4) 3年間の成果と課題

① 成果

(a) 日野町・日野町住民にとって

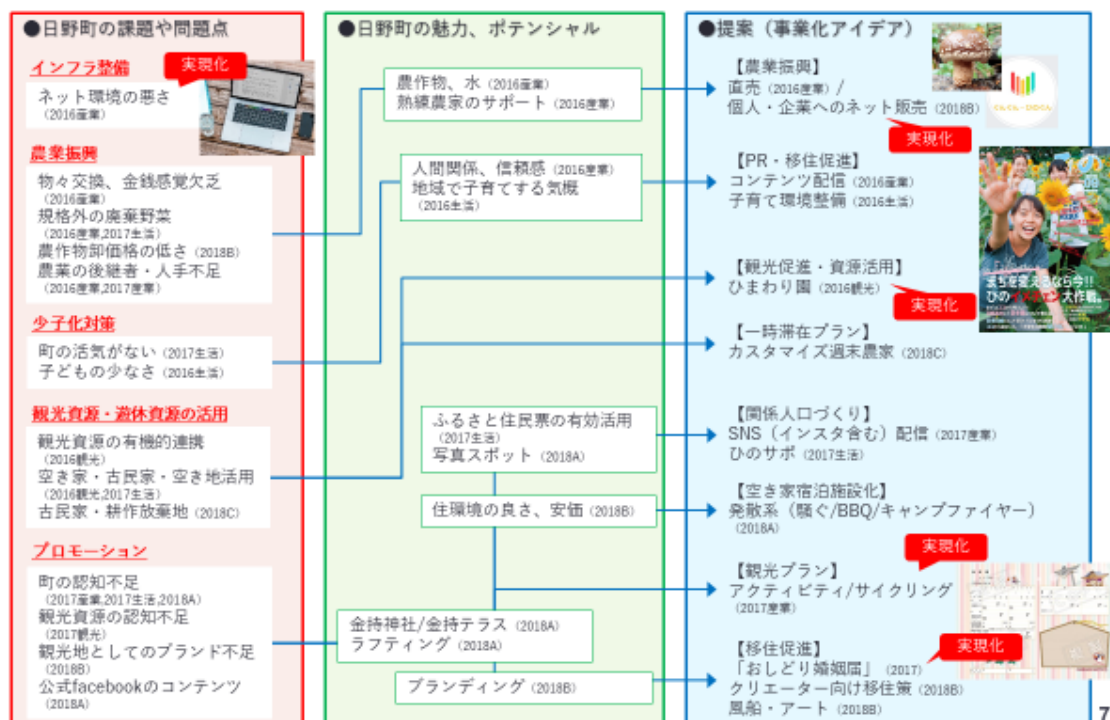
- ・フィールドワークやホームステイを通じた、町の魅力、生活課題、地域課題の発見と、若者ならではの忌憚のない意見とプレゼン内容が施策の実現に結びついた。
- ・日野町でお世話になった大学生が、日野町との「関わり」のきっかけを得ることにより、今後の関係継続の足掛かりとなった。

➤ プランの実現化

学生のプレゼンから、具体的に実現化されたプランは以下のとおり。(図表5 参照)

- ・鳥取県内でもブロードバンド環境の整備が遅れていた日野町において、町の予算化により光通信網を整備
- ・鳥取県庁の力添えを得て、日野高校保有の自転車が日野町にサイクリング用として譲渡
- ・地域おこし協力隊や地元有志の協力により休耕地を利用した「ひまわり迷路」を開園、お盆時期の帰省家族を中心にのべ528人が来園
- ・オシドリと金持神社を組み合わせた、ご当地婚姻届「おしどり婚姻届」を企画・制作
- ・参加学生が自主的に日野町を訪問し、日野町の産品（ハチミツ・しいたけ・えごまオイル等）のインターネット販売サイト立上げ

図表5. 日野町魅力化プロジェクト 学生のプレゼン内容と実現化施策



➤ 「ヨソモノ・若者」との接点による可能性

振り返り会においては、学生たちからは以下のような声があった。町は、意欲的な学生たちとの接点・関係性を積極的に活かし、「(ヨソモノ・若者視点を活かした) 町の PR 大使」にすることもできれば、「町の施策等のモニター」とすることもできる。町が抱える課題の打開策の一つとして、参加学生たちの力を活用する可能性があることが地域にとっての価値ともいえるだろう。

○これまで町と接点のなかった若者が「また訪れたい」と思うきっかけを創り出す

急速に少子高齢化、人口減少が進行している日野町にとって、町外（特に首都圏）から大学生が訪れ、かつ、何度も訪れたいと思ったということは、関係性が継続すれば町外と町内との交流が生まれ、人・もの・お金など資源の循環を生み出す可能性を持っているといえる。そこで、プロジェクトによって生まれた参加学生と町民との関係性を継続的に紡いでいくことが求められる（実際に足を運ぶ回数が限られたとしても、インターネット等を活用して継続していく工夫が必要である）。

○「ヨソモノ・若者」が継続的に町と関わり、事業化の面でも力を発揮する

日野町でよく聞かれる課題として「新しいアイデアを考え出す人がいない」「考えられたとしても実行する人手が足りない」ということがある。本プロジェクトでは、域外から来た大学生たちが、新しいアイデアを提案することまでは実行してきたが、振り返り会において「自分たちもビジネスに関わっていきたい」という声が多数あり、「実行する人手」になりうる可能性が生まれていることが明らかになった。ビジネスプラン実現化に向けた資金調達の仕事も構築できれば、より実効性の高いプロジェクトとなり得る。

(b) 参加学生にとって

- ・社会に出る前の時期に、新たな地域、新たな人との出会いの機会を得ることで、多様な価値観を醸成することができる。
- ・コミュニケーション、チームワーク、課題解決力、プレゼンテーション力等、意識面・スキル面において、学生の成長が見られた。

本年のプロジェクトには大学1年から4年までに加え、大学院生2名が参加した。年齢は18歳～24歳、これから大学生活の経験を重ねていく学生もいれば、来春には就職して社会人となる学生もいた。それぞれの学生にとって本プロジェクトの捉え方には、差異があると考えられるものの、「大学生・大学院生」という「自律的に学びとっていくことが求められる立場、社会に出て働く前のライフステージ」であることを踏まえると、大学生にとって本プロジェクトは以下のような価値があると考えられる。

○多様な人との出会いによって成長する

- ・町民との出会い：自分と異なる環境で生活する方と寝食を共にする経験、また町外から日野町へ移住した若者(地域おこし協力隊/30、40代)の方と話をしたりアドバイスをもらっ

たりする経験等は、参加学生にとって、貴重な出会い、体験となっていた。また町民の方への事後ヒアリングからは、学生との会話から町への新たな見方や若者の持つ知識を教えてもらう場面があったという話もあり、双方向に良い影響を与え合う関係性ができたことがうかがえた。

- ・**学生同士の出会い**：4大学から参加学生が集まり、また学年もばらけた多様な学生たちが、意志を持って本プロジェクトに参加した。事前ワークショップ等も通じて、本プロジェクトの趣旨を伝え、目的意識を高く持って2泊3日を共に過ごしたことで、参加学生同士が刺激を与えあう機会となった。共通の経験をした他大学の学生とのつながりは、今後の学生たちの人生にとっても大きな意義を持つことになるのではないかな。

○意識・スキル等の成長を促す

学生から聞かれた意見や、学生自身の振り返り結果から、本プロジェクトには人材育成面における効果があると考えられる。以下のような社会人に必要とされる意識やスキルを実践的に学びとる場となっている。

- －意識（自己発見、役割意識）、スキル（コミュニケーション力、プレゼンテーション力、課題解決力、企画力）、知識（社会課題に関する知識（過疎・少子高齢化）、地方創生等）

（c）副次的効果

- ・活動成果は、地元紙や地元メディア、日野町ケーブルテレビにおいて好意的に取り上げられ、鳥取県庁のホームページ等でも紹介された。最終日の報告会に参加する町民は限定的であったが、ケーブルテレビや地元メディアに取り上げられたことで、本プロジェクトがより多くの町民に知られることとなった。
- ・2019年2月には、東京大手町にて「日野町魅力化プロジェクト報告会」を実施。参加学生と日野町の関係継続につなげると共に、地方創生等に関心のある社会人に向けて幅広く、日野町や本プロジェクトを周知する機会とした。

② 課題

- 学生が提案したプラン、発見した魅力や課題が、町でさらに実現に結びつくための支援
学生が提案したプランのうちで、5件が実現化に結び付いたことは大きい成果と言える。一方で、まだ実現されていないプラン等については、「町の中で実現に向けて動く担い手が限られている」「学生がプラン実現に関わりたいたいと思っても、そのための仕組みがない」ことなどが実現化の難しい背景として挙げられる。前者については、プロジェクトに関わる住民をさらに広げるとともに、その関係性をより深めていくプロセスが必要である。後者については、学生の自主性にゆだねられていたが、高齢化・人手不足の状況下にある町を伴走的に支援するためには、プロジェクト実施後の資金調達等の仕組みを合わせて検討しておく必要がある。

➤ 学生と町の「関係」の継続のための支援

プロジェクトがきっかけとなり、大学生と町との「関係」が生まれる点も本プロジェクトの価値の一つである。学生と町民（ホストファミリー、地域おこし協力隊等）とは、個々人での関係を継続しているのが現状であるが、より長期的な関係継続を目指すためには、参加学生たちのOB・OG会づくりや、日野町が導入している「ふるさと住民票」とも連携した取組（日野町をふるさとと感じている人のプラットフォームづくり）等が考えられる。

➤ 日野町で得られたノウハウ・知見の他地域への展開

「日野町魅力化プロジェクト」を通して得られたノウハウや知見を、日本各地で同様の課題を抱える地域へ展開していく可能性を探っていく必要がある。その一環として、次項に掲載する「3. 実践フィールド（地域）の拡大に向けた取組」を実施した。

➤ 発展的な展開に向けた取組推進のためのプラットフォームの構築

上記3点で示した課題・今後の展開を推進していくにあたっては、プロジェクト実施のためのネットワークを広げ、地域と大学・大学生、関係する団体・組織をつないで、取組を推進するためのプラットフォームを構築していく必要がある。

3. 実践フィールド（地域）の拡大に向けた取組

「わがまち魅力化プロジェクト」は、2016 年から 3 年間、鳥取県日野町をフィールドに実践してきた。その実績を踏まえ、今後は実践フィールドである地域の拡大（わがまち魅力化プロジェクトの拡大）を目指し、日野町以外の自治体とのコラボレーションの可能性を探っていく必要がある。そこで、本プロジェクトの活動の一環として、次の 2 地域（自治体）とコミュニケーションの機会を設けた。

図表 6. ヒアリング実施地域の概要

【A 市の概要】

人口 6.3 万人（27,000 世帯）、2000 年をピークに人口減少に転じる。周辺を山に囲まれた自然豊かな土地柄である一方で、大規模なニュータウンや工業団地の開発が進む。就業人口は約 3 万人、産業別人口は第 1 次産業が 5.9%、第 2 次産業が 21.4%、第 3 次産業が 72.7%。伝統産業が盛んで、織物等も地元の基幹産業となっている。

（訪問日：2018 年 7 月 26 日（木））

【B 市の概要】

人口 9.8 万人（37,000 世帯）、政令指定都市に隣接する中核都市で、就業者の 2 割近くが政令指定都市へ通勤している。豊かな自然と歴史ある街並み、米をはじめ農産物の有数の産地である。農業を中心に食品加工業、電気機械工業、縫製業などが盛んで、道路網の整備によって企業進出も続く。

（訪問日：2018 年 10 月 10 日（水））

なお、わがまち魅力化プロジェクトのさらなる展開、ノウハウの蓄積という観点から、上記 2 地域（自治体）は、これまで実践活動を続けてきた日野町（人口約 3 千人）とは対照的に、人口が数万人～10 万人規模の市を選定した。

2 地域（自治体）とのコミュニケーションの内容は、次のとおりである。

- 地方創生に関する自治体の現状と行政としての課題認識、首長の意向等
- 魅力化プロジェクトと同様の取組の有無と内容、大学・学生と協働することによる行政としての期待や課題等
- その他

（1）A 市でのヒアリング結果

① 地方創生に関する自治体の現状と行政としての課題認識

これまでも、市の産業振興の一環として地場産業を支援してきたが、地場産業も新たな事業

展開を模索している段階にある。今後は、B to B から B to C へのビジネスモデルの転換、ブランド化、販路開拓を積極的に展開していく必要があるとの認識で、行政としても協同組合やデザイナー、専門学校等ともコラボレーションしながら施策を展開している。

観光面では、地域資源の少ない近隣の自治体と連携して DMO を設立、その下に関係事業者を巻き込み、行政が支援するという枠組みを構築した。現在、地元の伝統と文化を体験できるツーリズムの開発に努めているところであるが、設立して間もないため、具体的な効果は表れていない。

② 魅力化プロジェクトと同様の取組

過去に 2 年間、大学生が市の活性化策を提案し合う企画コンペを実施した。これは、地域内だけでは困難な課題の解決に向けて、大学の持つ専門的知識や学生の視点を活用しながら地域活性化を図ることを目的としたもので、この事業によって行政と大学生が互いに Win Win の成果が得られることをねらっていた。しかし、実際は、企画コンペの審査員の評価が、大学生の提案したビジネスプランの「事業性」に縛られすぎ、大学生ならではの自由な発想が出にくくなったという反省点もあった。行政側としては、大学生や若者視点は貴重であり、斬新であったという。

なお、市長は、特に「情報発信」（施策としてはシティプロモーション）を重視している。市長の企画コンペに対する印象は、学生の自由な発想はさておき、実行に移すための「実現性」の低さがネックとのことで、より実効性のある事業者と大学生の連携事業を展開することになった。

そういう経緯も踏まえ、企画コンペに代わる事業として、市内の事業者が学生とコラボレーションしながら、新商品開発や販路拡大、需要開拓を目指す、よりビジネス寄りの事業に移行した。本事業の主体は事業者であり、大学生のアイデアを活用しながら、土産物や特産物等を開発していくという趣旨のプロジェクトである。しかしながら、本プロジェクトに手を挙げる事業者が少なく、さらに実際取り組んでいる事業者にとっては、学生からの提案をどこまで反映する必要があるのか曖昧な点もあり、連携のしづらさを感じている事業者もいるという。

③ その他

現在、市内で活動している地域おこし協力隊は 2 名であるが、さらに地域資源発掘から特産品づくりまでを担ってくれる人材を募集している。

（２）Ｂ市でのヒアリング結果

① 地方創生に関する自治体の現状と行政としての課題認識

市の総合戦略の中には、「地域資源の活用」や「魅力の発見・編集」など、わがまち魅力化プロジェクトとも共通するキーワードが散りばめられている。市の知名度が低いと、シティ

プロモーションが重点施策であり、市の魅力を対外的に発信して、UIJ ターンや移住・定住などにつなげるための施策を展開しているところである。

② 魅力化プロジェクトと同様の取組

2～3 年前に、大学の夏季休暇中の 1 か月間、大学生のインターンシップを受け入れたことがある。市内の一つの地区（小学校区）で活動するもので、その地区は 5 つの自治会から構成される 1 千人規模の地区である。なお、この活動は地域シンクタンクが支援していた。

関東・関西からの大学生が空き家に滞在しながら、地域住民に聞き込みを行ったところ、この地区では廃校予定の小学校校舎の活用方法が決まっていないことが懸念事項ということが把握できた。それを踏まえて、大学生から空き校舎の活用方法について提案があったが、提案内容のその後については、具体的な進捗はないという。

日野町魅力化プロジェクトのような活動は、地元住民では気づかない点を指摘してくれるという点で、学生の視点、外部の視点は効果的であるとの評価であり、かつその取組をいかに継続するかが大事なことだという話であった。

なお、市のインターンシップは 1 か月間の長期だったが、日野町魅力化プロジェクトは 4 泊 5 日（2 泊 3 日）であり、日程が短いのではないかという指摘もあった。上記のインターンシップでは、その後の活動のしやすさにつなげるため、まずは地域のお祭りに参加し、大学生のお披露目のような機会をつくることで、顔の見える関係のきっかけづくりに心がけたという。

③ その他

市内では、現在、7～8 名の地域おこし協力隊が活動している。年数回実施される移住体験ツアーや交通会館（ふるさと回帰支援センター）での移住セミナーなどの機会に、地域おこし協力隊も参画、PR している。

（3）2 地域とのコラボレーションの可能性

A 市と B 市に共通して、大学生（若者）の視点やアイデアを事業や施策に活用しようという試みがなされていた。しかしながら、その取組の結果は、必ずしも事業の具現化・実現化、あるいは施策への反映につながっていないのが実情だった。その点、日野町魅力化プロジェクトでは、活動成果として大学生が提案したアイデアが、実現化したものもいくつかある。

活動のアウトプットとして何を目指すかにもよるが、魅力化プロジェクトの成果である事業化アイデアの目指すところは、「スモールスタート」という考え方であり、いかにお金をかけずに、できることから、とにかく実践につなげるかという点にある。それに加えて、誰が実行するかという点も想定が必要であろう。

目に見える効果がなければ、魅力化プロジェクトを継続していくことも困難になるので、偶然にも両市へのヒアリングから、「スモールスタート」の大切さについて、あらためて学ぶことができた。

また、日野町と同様に A 市と B 市からも、農業・産業振興、移住・定住、観光資源活用などのキーワードが挙げられ、自治体の規模や地域の特色は異なるものの、同じような問題を抱えていることがわかった。

なかでも、いずれの自治体もシティプロモーションを重点施策の一つとして掲げている。当該市町村名が認知されていないことから始まり、それに連鎖して全国的なブランド力の低さ、観光地としての認知度の低さにつながることから、実効性のある情報発信方法について模索しているとのことであった。

今年度の日野町魅力化プロジェクトでは、大学生の視点から、どのようなツールを使って、どのように情報を検索しているかなども含め、プロモーションに関する提案もあった。全国 1,724 自治体の中で、「〇〇といえば、□□市」（あるいは、その逆）と即座にイメージできるものをどうやってつくり上げていくか、若者視点も有効にいかしていくべきであろう。

最後に、今回ヒアリングした 2 市では、それぞれ特色を持った興味深い施策もある。

A 市は、地域の特産品としてある果物を推しているが、実際その加工品がメディアに紹介されたところ、一時品薄状態になったという。まさにメディアの活用というの、地域ブランドを成功させる一つの要因になろう。しかしながら、地域では様々な農産物が生産されているものの、加工品の種類は少なく、6 次産業化が課題となっている。

A 市では、月 1 回のペースで、設定されたテーマ・分野に沿ってタウンミーティングが開催されている。これに、例えば「特産品の 6 次産業化」のようなテーマで、魅力化プロジェクトでの学生のまち歩き、提案・発表、そして地域住民との対話の機会を合わせるというコラボレーションの形も考えられる。

B 市では、市独自のブランド認証制度（食品加工品）、B 市出身者など首都圏に在住する若者のグループ形成など、興味深い施策を様々展開している。そこで、例えば、首都圏在住の若者グループと魅力化プロジェクトの参加大学生を組み合わせ、いったん B 市を離れて首都圏で暮らす若者から、まったく B 市を知らない大学生に B 市を案内してもらったり、魅力を紹介してもらったりする（魅力の再発見）という取組も面白い化学反応が起きるかもしれない。

また、過去に実施した大学生のインターンシップ受入れ時の課題と提案について、数年経過した今、魅力化プロジェクトとして再び学生によって再検証するという試みも面白いかもしれない。

いずれにせよ、引き続き A 市と B 市とのコミュニケーションを継続し、コラボレーションの可能性を探索していくとともに、実践フィールド（地域）の拡大という観点から、その他自治体にもアプローチを進めていきたい。

4. 今後の展開に向けて

(1) わがまち魅力化プロジェクトの展開

「わがまち魅力化プロジェクト」は、2016年から3年間にわたり、鳥取県日野町をフィールドに実践してきた。繰り返しになるが、魅力化プロジェクトは、高齢化と過疎で悩む日野町をフィールドに、東京と地方の大学生が協働し、まち歩きや体験等を通じて、まちの課題や魅力を探り、大学生から事業化アイデアを提案する実践活動である。毎年10数名を日野町に派遣し、町役場及び地域住民、事業者の方々へ提案を行ってきた。

この間、参加学生の所属する大学の数も増えてきた。様々なバックグラウンドや参加目的を持った大学生が、複数の大学から集まってくるようになり、メインプレイヤーである参加大学・大学生はバラエティに富んできたといえる。

「わがまち魅力化プロジェクト」のように、それまで接点のなかった地域と大学生が、まさにその地域をフィールドとし実践的に学び合うことは、双方にとって刺激や気づきのある機会であり、大学生にとっての貴重な成長機会にもなっている。また、地域と大学生の関係性が継続することは、将来の町の持続可能性を考えると、さらに意義のある取組になるといえるのではないだろうか。

一方で、実践フィールド（地域）の方は日野町の一自治体のみであるため、新規の協力自治体へのアプローチを継続的に進めていく必要がある。魅力化プロジェクトのさらなる事業拡大・事業展開に向けては、参加する大学・大学生の開拓とともに、フィールドとしての自治体（集落等の一地区でも可）の開拓も併行して取り組んでいく必要がある。

なお、一つの方向性として考えられるのは、郡単位にフィールドを広めることである。鳥取県日野郡には、日野町のほか日南町、江府町が属している。3町合わせて日野郡の人口は約1万人である。そこで、日野町だけの地域ではなく、隣接する町も合わせて、郡単位で魅力化プロジェクトを実践していく方法も検討していきたい。

(2) プラットフォーム設立準備

昨年度のわがまち魅力化プロジェクトの事業の一環として、同様の学生まち歩きプロジェクトの全国事例を収集し、その活動内容を整理・考察した（詳細は「わがまち魅力化プロジェクト～サステイナブルな地域社会の創生事業（事業報告書）」（社会開発研究センター/日本総合研究所, 2018.3）参照）。

その結果、全国事例からみえる活動上の共通課題として、i 参加学生の確保、ii 新規・継続自治体の確保、iii 事務局機能の整備（体制整備）に集約されることがわかった。i と ii については、大学・学生や自治体との継続的なコミュニケーションが不可欠である。iii については、学生主体という性格は残しつつも、大学のほか複数の機関・組織が連携する枠組みで

あるプラットフォームを構築し、より効率的に実践活動を進めていくことが不可欠であること、その中でシンクタンクが中立的・第三者的な立場から、そのプラットフォームの「つなぎ役」を担える可能性があることが示された。

学生をはじめ若者の発想や行動力は、地域の活性化や魅力化に資する力になり得るため、その力を各地に広げていくためには、その活動を組織的にバックアップしていくプラットフォームの存在が不可欠となる。そこで、本年は、学生のまち歩き活動の推進母体としてのプラットフォームのあり方について、具体的に検討を行った。その概要は、以下のとおりである。

① 実現化するプラットフォームの特徴

構想段階ではあるものの、プラットフォームの特徴として、「参加者（会員）同士の関係性の強化」、「全国各地の地方創生関連の事例等の情報集約」、「地域の様々な課題やニーズに対応するソリューションの協創・提供」を挙げる。

地域力の根源は、住民の力であると考え。「協創」（造語）の意味は、「地域住民が自ら考え、行動していくこと」を目指し、その原動力を引き出す方法として、地域住民と大学生といった若者やよそ者の力を融合していくのが得策と考える。

② プラットフォームの事業イメージ

プラットフォームの事業として大きく2分野を挙げる。一つは、これまでも実践してきたわがまち魅力化プロジェクトである。既述のように、学生によるまち歩き（フィールドワーク）をメインに、その周辺支援として、事前事後の研修プログラムによる人材育成、活動レポートの制作・普及活動等を行うものである。もう一つは、ネットワーク化事業である。これは、様々な分野の関係者とのネットワークを通じて、地方創生に関する全国事例や制度等の情報を収集・整理し、それを基に情報提供や新たなプログラムメニューの考案、外部への発信等（セミナー等）を行うものである。

③ プラットフォームの課題と解決策

上記のようなプラットフォームを構築し、中立的なシンクタンクである JRI・SDRC が運営サポートしていくことで、全国事例からみえる活動上の共通課題（i 参加学生の確保、ii 新規・継続自治体の確保、iii 事務局機能の整備（体制整備））について、次のような解決策を導くことができる。

i 参加学生の確保

- 既存の連携大学・学識者とのパイプ強化、過去の参加大学生との継続的なコミュニケーション
- 地方創生関連の学部を有する大学やフィールドワークを行っている大学への新規ア

アプローチ

ii 新規・継続自治体の確保

- 大学生や外部人材を活用した取組推進自治体への直接的アプローチ
- 同様の既存の全国事例（プラットフォーム）との連携、関係団体からの紹介、本プラットフォームの会員企業・団体からの推薦等といった間接的アプローチ

ii 事務局機能の整備（体制整備）

- 本プラットフォームの設立と JRI・SDRC の運営サポート

④ 主な連携先

プラットフォームにおける主な連携先は、地域（地方自治体、小地域、地域づくり団体含む）、大学（大学生・留学生）、企業・団体を想定する。

プラットフォームに参画する地域と大学については、地域課題に悩んでいる地域と地方を体験し実践活動に取り組みたいと考える大学生をマッチングする。

また、連携する企業・団体にとっては、課題解決型ビジネスの創出や社会貢献等を通じて、地方創生に資する民間の力の醸成につながろう。

JRI・SDRC は中立・独立の立場から、多様な関係者のつなぎ役として、地方創生をけん引することも可能と考える。また、全国の地域シンクタンクとのネットワーク化を図ることで、地域の実情に応じた方策を提案、JRI・SDRC ならではの地方創生を構想していくこともシンクタンクに与えられた社会的責任と考える。

上記（１）（２）に関連し、「わがまち魅力化プロジェクト」の３年目以降の事業方針として、以下の点からさらなる展開をしていく予定である（これまでの継続含む）。

- 大学（参加学生）の新規開拓、実践フィールド（地域）の新規開拓
- 日野町での実績の他地域への応用可能性に関する F/S 調査
- 地方創生に関する全国先行事例調査（情報・ノウハウの蓄積）
- プラットフォーム設立に向けた準備
- 地域における幸福度研究（地域住民へのヒアリング等、質的データの収集、データベースの構築）

本プロジェクトにご関心のある方（もっと詳しく話を聞いてみたい／わが地域でも受け入れたい／一緒に活動したい など）は、下記担当者までご連絡ください。

【問合せ先】

一般財団法人日本総合研究所 調査研究本部

担当：内田・高野

〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町 15 番 8 号 アークブランシェ四谷 3F

TEL：03-3351-7575（代） FAX：03-3351-7561

Email：uchida*jri.or.jp（＊を@に変更して下さい）

URL：https://www.jri.or.jp/

2018 年度 わがまち魅力化プロジェクト

～サステイナブルな地域社会の創生事業～ 事業報告書

発行日 2019 年 3 月

発行所 一般財団法人社会開発研究センター（SDRC）

一般財団法人日本総合研究所（JRI）
